中筋川付替工事

中筋川は河床勾配が極めて緩く、大雨のたびに本川の渡川（四万十川）が逆流して沿川に大きな被害を及ぼしてきました。このため、昭和 4 年の当初の渡川改修計画では、中筋川と本川との合流点を具同地先から約 1,850m下流の山路地先に付け替えて、逆流水位を低下させることにしました。

ところが、昭和 10 年 8 月に渡川は記録的な大洪水に見舞われ、中村町（現四万十市）市街地をはじめ一帯は一面湖と化しました。このため、当初計画を変更せざるを得なくなり、中筋川の逆流水位をさらに低下させるため、甲ヶ峯を開削し、背割堤をさらに 2,650m追加して下流の実崎地先まで延長することとしました。こうして旧合流点の具同地先から実崎地先の新合流点までの延長約 4,500mの間で、坂本背割堤、甲ヶ峯の開削、山路背割堤、新中筋川の掘削などの工事が行われることになりました。

坂本背割堤の工事は、昭和 12 年度に着手以来、渡川改修の重要箇所として毎年施工されましたが、毎年のように出水に見舞われて工事は難航しました。当時工事に携わった人の回想によると、「賽の河原」で石を積むのと同じで、造っては流し造っては流しの繰り返しだったとのことですが、工事方法の工夫などにより問題を克服して、昭和 30 年度には甲ヶ峯までの坂本背割堤はほぼ完成しました。

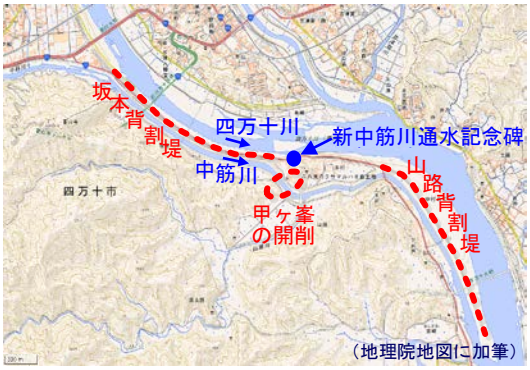
また、甲ヶ峯の開削工事は昭和 13 年度に、山路背割堤の工事は昭和 14 年度に着手されましたが、その後戦時の資材・労力不足の影響を受けて工事は縮小傾向をたどり、昭和 19 年度には大部分の工事が休止の状態となり、戦後は南海大震災やたびたびの洪水によって工事が阻まれました。昭和 31 年度から甲ヶ峯の開削と山路背割堤の工事が再開され、昭和 32 年度には新中筋川の掘削が開始されました。新中筋川予定地の大部分は戦前に買収済みでしたが、戦時中の食糧難のためそのまま耕作が続けられていたことなどから山路地区で用地交渉が難航したものの、昭和 34 年 2 月に問題が解決して工事を行うことができるようになりました。

甲ヶ峰で新中筋川の通水式が行われたのは昭和 39 年 2 月でした。昭和 12 年の着工以来 27 年の歳月を要して、沿川住民長年の悲願が実現しました。中村市長による新中筋川通水記念碑の碑文には、工事の経緯及び経過、関係者の努力への感謝、工事犠牲者の冥福を祈る言葉などが記されています。当時地元の人々がいかにこの工事の完成を待ち望んでいたのかを知ることができます。

＜参考文献：新中筋川通水記念碑の碑文、建設省四国地方建設局中村工事事務所編「渡川改修四十年史」1970 年、建設省四国地方建設局中村工事事務所編「六十年のあゆみ」1991 年など＞

坂本背割堤（左に中筋川、右に四万十川）

新中筋川通水記念碑



（地理院地図に加筆）